

日本と英語のなぞなぞ比較 (3)

——反義語・反復表現を含まないなぞの日英比較, 「なぞなぞ」の特徴——

清海節子

1. はじめに

日本の伝統的ななぞなぞである二段なぞと、英語（主にイギリス）のなぞなぞには、反義語や反復が多く観察される。それらの特徴に注目して、清海（2012a, 2012b）は、日本と英語のなぞなぞを比較研究し、どのような共通点と相違点があるかを検討した。まず、清海（2012a）では、両言語の反義語について品詞を手がかりに考察し、その結果、日本のなぞなぞには、動詞の反義語が英語の2.6倍近く多く観察されることが分かった。次いで清海（2012b）では、両言語のなぞなぞ表現での反復用法に関して考察し、日英両データの半数近くが、音・句・節いずれかの繰り返しを含むことが認められた。さらに、反復に関連して日本のなぞなぞは、「構文」が重要な役割を果たし、英語のなぞなぞでは、「韻」が中心的役割を担うことも明らかにされた。これら2つの論文で提案された2言語間に共通してみられる特徴は、なぞなぞに「反義語」と「繰り返し表現」が頻繁に使用されている点である。そして、日英の違いを要約すると、反意性を示す品詞の割合が大きく異なること、そして、日本の二段なぞデータの3割が構文に関連し、その構文が同時に生産性にも貢献すること、また、英語のデータの3分の1以上に韻が含まれること等があげられる。さらに、これらの違いは、言語がことば遊びに与える影響を示唆していると考えた。換言すると、反義語と反復という技法は共有されながらも、言語のどの要素を利用するかにかんしては、各言語で決定されるだろうと提案した。

本稿は、日本と英語のなぞなぞにかんして、これまでの2つの論文で扱ったサンプルデータの中で、反義語や繰り返しがない例を取り上げ、表現内容に注目して、日英のなぞなぞの共通点と相違点を検討する。さらに、「なぞなぞ」に関する特徴を4つの視点から考察する。次の2節と3節では、今回の日英のサンプルデータで、「場所」「時間」「数」「色彩語」「身体名称」に関連する語彙を調査する。4節は、データで得られた結果から、反義語・反復表現がない日英のなぞなぞの関連語彙について共通点と相違点が説明される。5節では、なぞなぞの特徴を論じ、最初に、子どもにとってのなぞなぞについて、次に「なぞなぞらしさ」、3番目に、なぞなぞ

の分類,そして,4番目に,ことば遊びの機能としてのなぞなぞにかんして考察する。最後の6節では,結論が述べられる。

2. 日本の二段なぞ

最初に,日本の二段なぞを取り上げる。『世界なぞなぞ大辞典』(1984)の「日本本土のなぞなぞ」という項で紹介されている中で,日本の伝統的な子供向けの二段なぞを対象とし,三段なぞは除くことにする。サンプルデータの総数は158であり,その中で,反義語と反復表現を含まない58例の表現には,どのような内容の表現が用いられているのだろうか。以下,「場所」「時間」「数」「色」「身体」に関連する語彙について,順にみていくことにする。以下の二段なぞは,最後の部分の「…なあと」や「…なんだ」は省略されている。

2.1 場所を示す表現

問いの中に場所が表現されている例は,全部で33あった。それらは,家に関する場所,家以外の近くの場所,その他の場所(特定化されていたり,家から離れた場所)の3つに分類される。結果は以下の通りである。

- (1) 「家に関連する語」 [10] ----- 家(4), 座敷(2), 障子(2), 畳(1), 庭(1)
 「家以外の場所」 [18] ----- 畑(8), 山(3), 道(2), 海(1), 松原(1),
 野原(1), 土の中(1), 木の上(1)
 「その他」(特定化された/離れた 場所)
 [5] ----- 箱の中(1), 湯湯治^{とうじ}(1), 星(1), 地獄(1)

上に挙げた分類の順に,実例を数が多い順に挙げると次のようになる。¹⁾

- (2) 「家に関連する語」 [10]
 家中で一番のひびきらし。(壁)
 家中の力持ち。(大黒柱)
 家のめぐりの檜千本。(つらら)
 家のまわりを太鼓たたいて歩くもの。²⁾(雨垂れ)
 青い座敷に金の盃1つ。(太陽(あるいは月))
 きれいな座敷に居た1枚足りないもの。(便所)

朝早く障子の目をとんで歩くもの。(はたき)
障子のかげに赤い小僧さん百人。(ザクロ)
朝げ起きて暈の目を勘定するもの。(ほうき)
毎朝赤いずきんをつけて庭を掃いているもの。(鶏)

(3) 「家以外の場所」 [18]

畑から鈴を鳴らしてくるもの。(大豆)
畑でおはぐろつけているもの。(ナス)
畑の真中に赤い頭巾かぶっているもの。(唐辛子)
畑で白い顔しているもの。(大根)
畑で立ちんぼう。頭に毛をはやし, 皮をむくといぼばかり。(トウモロコシ)
だんだん畑に穴1つ。(湯たんぼ)
四角畠に牡丹の花1つ。(いろり)
畑の中に赤いももひきはいているもの。(ニンジン)
黒山に坊主3人。(鍋の底)
山がまわれれば大根が育つ。(糸より粹)
山から太鼓たたいてくるもの。(水(あるいは空気))
土の中で真黒になって働いているもの。(ゴボウ)
1本道に草ぼうぼう。(歯ブラシ)
朝早く起きて細い道通るもの。(雨戸)
海ひとまたぎ。(鍋のつる)
千すじの松原にヒヨが鳴いて通るもの。(はた織り(あるいはむしろ織り))
広い野原ににょう2つ。(乳:「にょう」は稲積みのこと)
木の上に立ってお月様見ているもの。(親)

(4) 「その他」 [5]

昼間でも見える星。(物干し)
世界で一番赤い星。(梅干し)
箱の中に千人坊主。(マッチ)
三角の殿様が石車に乗って, 湯湯治とうじに行くもの。(蕎麦)
朝早く起きて地獄へ行くもの。(つるべ)

以上の例で示されている通り、問いの中に場所が表現されているなどの数は今回対象とするデータ58例中33例で、約57%であった。この高い割合の理由の一つに、今回のデータが伝承的な民俗のなぞなぞに限定されているということもあげられるだろう。しかし、サンプルデータの6割近くに場所を指す語彙が見つかったのは、日本のなぞなぞの特徴の一つとして捉えられるべきである。

2.2 時間を表す表現

時を示す表現が使われているなどは、以下にあげる11例である。

- (5) 朝早く起きて細い道通るもの。(雨戸)
- 朝早く起きて地獄へ行くもの。(つるべ)
- 朝早く起きて大ッ煙草を吸うもの。(破風)
- 朝起きて鱒買いに行くもの。(灰ならし)³⁾
- 朝げ起きて畳の目を勘定するもの。(ほうき)
- 朝早く障子の目をとんで歩くもの。(はたき)
- 毎朝赤いずきんをつけて庭を掃いているもの。(鶏)
- いつも人の後をついて行くもの。(影)
- 離れたことがなく、いつも共稼ぎするもの。(はさみ)
- 昼間でも見える星。(物干し)
- 夏に出てくる冷たい一本足のお化け。(アイスキャンデー)

注目すべき点は、11例中、「朝」が7例、「いつも」が2例で、「昼」と「夏」が1例ずつである。「夜」「晩」は、今回検討するデータには見つからなかっただけで、二段なぞにないわけではない。しかし、今回のデータで、「朝」が圧倒的に多いことから、二段なぞが、子どものことば遊びであることを証明していると捉えられる。

2.3 数が含まれるなぞなぞ

数が含まれるなぞは、58例中24例であった。一つのなぞなぞに、2つの数が用いられている場合もある。顕著な点は、一番多く見つかった数が「1」であり、次に多かったのが、「2」、「3」、「1000」で、一桁と四桁というような離れた数が使われていることである。次に示すように、データ中に用いられている数が、1～12と、100または1000で、それぞれが少数であること、多数であることを強調するための効

果を期待して、差がある数が使われていると思われる（カッコ内は使われている数で、点線の右は例数である）。

- (6) 「1」 --11, 「2」 --5, 「3」 --5, 「4」 --2, 「12」 --1,
「100」 --1, 「1000」 --5

上の例の総数は30であるが、一つの例で2種類の数が用いられているなぞが6例ある。以下、同じなぞが重複される場合もあるが、数（下線が施された）が少ない順に例を挙げる。

- (7) 「1」 家中で一番のひびきらし。(壁)
きれいな座敷に板1枚足りないもの。(便所)
世界で一番赤い星。(梅干し)
青い座敷に金の盃1つ。(太陽 (あるいは月))
1本道に草ぼうぼう。(歯ブラシ)
夏に出てくる冷たい一本足のお化け。(アイスクャンデー)
だんだん畑に穴1つ。(湯たんぽ)
親さまひとりに笠2枚。(俵)
ふたり坊主に袈裟1つ。(火箸)
四角島に牡丹の花1つ。(いろり)
3本足の1つ目小僧。(写真機)
- (8) 「2」 広い野原にによう2つ。(乳; 「によう」は稲積みのこと)
ふたり坊主に袈裟1つ。(火箸)
親さまひとりに笠2枚。(俵)
3つ目小僧に歯が2本。(下駄)
12人のお客様にお酌取2人。(時計の針)
- (9) 「3」 3人兄弟首まがり。(ごとく)
黒山に坊主3人。(鍋の底)
三角の殿様が石車に乗って、湯湯治とうじに行くもの。(蕎麦)
3つ目小僧に歯が2本。(下駄)

3本足の1つ目小僧。(写真機)

(10) 「4」 四つ子の背中あぶり。(いろりぶち {炉ばたの4本の木})
四角畠に牡丹の花1つ。(いろり)

(11) 「12」 12人のお客様にお酌取2人。(時計の針)

(12) 「100」 障子のかげに赤い小僧さん百人。(ザクロ)

(13) 「1000」 千人坊主の縄ふっぱり。(数珠)

{津軽:「ふっぱり」=ひっぱりこと}

千すじの松原にヒヨが鳴いて通るもの。

(はた織り(あるいはむしろ織り))

小人千人で綱曳きしているも。(納豆)

家のめぐりの槍千本。(つらら)

箱の中に千人坊主。(マッチ)

上の例の中で、「1」は「最も」の意味で「1番」として使われているのが、2例ある。また「三角」四角」のように数で形を表す例もある。「2」は例から考えると、「1」「3」など別の数と一緒に使用される場合が多いのではないかと想像される。事実、例えば、「ふたり坊主に袈裟1つ」「四角畠に牡丹の花1つ」等は、二つの数が対比されて反義的に使用されていると考えてよいだろう。

今回のデータで見つけられた数の中で「1」が一番多く使われているが、これは、注目すべき特徴であると考えられる。英語は、加算名詞が単数だということを文法的に冠詞の‘a’で義務的に表すが、日本語では、単数であることを示す必要はないと言うより、普段は数を特定しないことの方がむしろ多い。例えば、上の例の多くは、「1」を省略することが可能であり、「1」を含む例を次のように言い換えても意味的に重大な欠陥が生じないと思われる。

(14) 青い座敷に金の盃1つ。 →青い座敷に金の盃。

1本道に草ぼうぼう。 →道に草ぼうぼう。

だんだん畑に穴1つ。 →だんだん畑に穴。

数の入った左のなぞと、数なしのなぞの差をどのように説明できるだろうか。興味深いことに、『新版ことば遊び辞典』には、津軽で採集された二段なぞの中で、「葵の座敷に盃1つ」の他に、「1つ」が省かれた「青い座敷に銀の盃」や、「あおいの座敷に金の盃」が挙げられている。従ってこの種のなぞでは、「1つ」が必須ではないことが分かる。それでは、「1つ」の働きは一体何であろうか。提案されるべき可能性として、複数でないことを明言し、問いの情報をできるだけ「正確」にするだけでなく、数で表された名詞を‘salient’ (卓立的) にする作用が挙げられる。「1」という数は、われわれのイメージをより具体的に作る働きがあると推測できる。つまり「青い座敷に金の盃1つ」では、「1」が修飾する名詞の前景化(‘foregrounding’)を促し、同時に、口調(リズム)を整える効果も上げているのである。

ところで、なぞなぞと近い関係にある「ことわざ」の表現には、どのような数が使用されているのであろうか。奥津(2000: 201-223)は、奇数は好ましい数で、偶数は、好ましくないと一般に考えられ、特に3, 7, 9は靈驗不可思議な数として、英語の慣用表現やことわざに高い頻度で使用されていると述べている。しかし、日英のことわざを比べると、3, 7, 9以外では、日本のことわざの方がはるかに多く数が用いられている。奥津は例として、‘Seeing is believing’は、直訳すると「見ることは信じることである」という論理的な表現であり、日本人には直裁すぎて面白みに欠けていると言う。この英語ことわざに相当する「百聞は一見に如かず」は、具体的に、多い数を表す「百」と少ない数代表の「一」を対比させ、日本人には分かりやすい表現であると説明している。ことわざで、数を使用する効果について、奥津(2000: 221)は、「ことわざにおいて、数は、多くの場合誇張表現のために、またことわざに具体性を持たせ、より強く訴える力とおもしろみを与えるために用いられている」と述べている。この奥津の主張することわざの数の働きは、なぞなぞの表現に使われる数にも当てはまると思われる。つまり、なぞなぞに於いても、数は、誇張や具体性を持たせる働きがあり、修飾される名詞を‘salient’にする目的で用いられていると言えるだろう。

2.4 色彩語

色彩語が入ったなぞなぞは、全部で12例あった。色の種類は4色(白, 赤, 青, 黒)である。「赤」が6例と一番多く、次に「黒」が3例、「青」が2例、「白」が1例である。以下、色の数が多い順に例を挙げる。

- (15) 「赤」 世界で一番赤い星。(梅干し)
畑の真中に赤い頭巾かぶっているもの。(唐辛子)
障子のかげに赤い小僧さん百人。(ザクロ)
畑の中に赤いももひきはいているもの。(ニンジン)
赤いねえさん腰曲がり。(エビ)
毎朝赤いずきんをつけて庭を掃いているもの。(鶏)
- (16) 「黒」 黒山に坊主3人。(鍋の底)
土の中で真黒になって働いているもの。(ゴボウ)
畑でおはくろつけているもの。(ナス)
- (17) 「青」 青竹に節なし。(ネギ)
青い座敷に金の盃1つ。(太陽(あるいは月))
- (18) 「白」 畑で白い顔しているもの。(大根)

2.5 身体名称

身体部分の名称が含まれたなぞなぞは、11例あった(その内1例に2つの身体名称が用いられている)。「目」が3例で、「足」が2例で、残りすべては1例ずつである。「頭部」に関連する7例と、「頭部以外」の5例に分けて示すと以下ようになる。

- (19) 「頭部」に関連するもの
- 朝げ起きて目を勘定するもの。(ほうき)
朝早く障子の目をとんで歩くもの。(はたき)
3本足の1つ目小僧。(写真機)
3人兄弟首まがり。(ごとく)
3つ目小僧に歯が2本。(下駄)
畑で白い顔しているもの。(大根)
畑で立ちんぼう。頭に毛をはやし、皮をむくといぼばかり。(トウモロコシ)

(20) 「頭部以外」

四つ子の背中あぶり。(いろりぶち {炬ばたの4本の木})
出べそへ火をつけられるもの。(風呂のかま口)
夏に出てくる冷たい一本足のお化け。(アイスキャンデー)
3本足の1つ目小僧。(写真機)
赤いねえさん腰曲がり。(エビ)

2.6 日本のなぞ：まとめ

反義語と反復表現を含まない58例の表現に「場所」、「時間」、「数字」、「色彩語」、「身体名称」に関連する語彙がどの程度使われているか調査した。「場所」に関する語は、58例中33例にあり、サンプルデータの6割弱が、場所の語彙を含んでいた。次に「時間」の例は11あり、その中で「朝」が7例と多かった。「数字」は24例で見つけられ、「1」が11例で一番多く、次に「2」、「3」、「1000」が多く5例ずつあった。「色彩語」は4色(白, 赤, 青, 黒)で12例あった。また、「身体名称」は、一番多い「目」(3例)を含む11例であった。

3. 英語のなぞ

次に、英語のなぞを取り上げる。『世界なぞなぞ大辞典』(1984)の「イギリスのなぞなぞ」という項で紹介されている英語(イギリス {ケルト語圏を除く}とアメリカ合衆国に限る)をサンプルデータにする。総数は130であり、その中で、反義語と反復表現が含まれない数を調べてみると45で、総数の約35%に相当する。

これらのなぞなぞですぐに気づく顕著な点は、‘wh-questions (‘how’も含めた)’と呼ばれる疑問詞で始まる問いが多いことである。実際、今回扱う45例の内39例は、‘how’を含む‘what, which, who, why, when, where’が問いの最初の語であることが分かった。つまり、データの約87%の問いは、そのような疑問詞のどれかで始まるのである。以下に、各疑問詞を頻度が高い順に示す(カッコ内の数は使用されている例数である)。

(21) what---[25] why---[5] which---[3] who---[2] how---[2]
when---[1] where---[1]

上で示されている数に注目すると、‘what’が他の疑問詞をはるかに引き離してい

るが、日本の二段なぞの最後の部分の「…なあに」に相当するので、数が多いのは当然と言えよう。また、一番少ない、‘when’ と ‘where’ は1例ずつであった。

以下、3.1-3.5では、2節で扱った項目に沿って比較検討し、3.6では、音解きなぞを取り上げる。

3.1 場所を示す表現

問いの中に場所が表現されている例は7例だけあった。日本の33例に比較するとかなり少数である。問いの中に場所が表現されている例は、次のように、「家に関する場所」と「家以外の場所」の2つに分類される。

(22) 「家に関連する語」 [4]⁴⁾---- 家(3), 食卓(1)

「家以外の場所」 [3] ---- 島(1), パリ(1), 刑務所(1)

以下にそれぞれの例を挙げる。

(23) 「家に関連する語」 [4]

House with one leg. 1本足の家。 (傘 : umbrella)

What goes all round the house and makes just one track?

家の近くを動き回り、一筋のわだちを残すもの。

(1輪の手押し車(ねこ車) : wheelbarrow)

A crowd of little men livin' in a flattop house.

平屋根の家に、大勢の小人。 (箱の中のマッチ : matches in a box)

Which of you kin is nearest you at the table?

食卓で一番近い親戚(kin)はだあれ。 (ナプキン : napkin)

(24) 「家以外の場所」 [3]

Why is an island like the letter T? 島はなぜTという字に似ているの。

(水(water)の中にあるから : Because it is in the midst of water.)

What is in the middle of Paris? パリの真中には何がある。

(Rという字 : the letter r)

How do we know that photographs have been to jail?

写真が刑務所へ行ってきたってということどうしてわかる。(写真はどれにも

前科の記録があるから : Because they all have records.⁵⁾

場所を表す語が含まれるなぞは, 以上のように7例である。これは, データの中の約16%であり, 日本のなぞで半分以上に場所を表す語が見つけれられた結果に比べてかなり数が少ないと言える。

3.2 時間を表す表現

日本のデータでは, 時を示す表現が使われているなぞは, 10例あったが, 英語は, 次の2例(「いつも」「正午」)だけである。しかも, ‘noon」「正午」は, 時間を表す副詞としてではなく, 名詞として用いられている。

(25) Who always goes to bed with his shoes on?

いつも靴を履いたまま寝るのは, だあれ。 (馬 : horse)

Why is the letter A like noon? A という字はなぜ正午に似ているの。

(1日(day)の真中にあるから : Because it's in the middle of day.)

3.3 数が含まれるなぞなぞ

数が用いられているなぞは, 日本のデータでは24例であるが, 英語のデータでは, 10例でやや少ないと思われる。日本のデータと同様に, 一つのなぞなぞに, 2つの数が用いられている場合もある。注目すべき点は, 最も多く見つかった数の一つは, 日本のデータと同じ「1」であるが, 日本の11例に比べて英語のデータでは3例しかない。次に示すように, 一桁の1~6までと二桁の39, そして3桁がなく, 四桁の1000という多さを強調する数が使われている(カッコ内は使われた数で, 点線の右は例数である)。

(26) 「1」 -- 3, 「2」 -- 1, 「3」 -- 1, 「4」 -- 3, 「6」 -- 1,
「39」 -- 1, 「1000」 -- 3

以下, 少ない「数」が用いられている順に例を見ることにする。

(27) 「1」(「4」)

House with one leg. 1本足の家。 (傘 : umbrella)

What goes all round the house and makes just one track.

家の近くを動き回り一筋のわだちを残すもの。(1輪の手押し車(ねこ車))

What is it that has four legs and one back, 脚4本と背中もあって,

Yet can't walk? 歩けないのはなあに。(いす: chair)

(28) 「2」「1000」

What is this? 背骨2本に

Only two backbones, 千本のあばら骨

A thousand ribs. これなあに。(鉄道線路: track)

(29) 「3」「4」

There was a thing three days old アダム(の顔)が80才の時

When Adam was four score. 生後3日のものがありました。

(三日月: crescent)⁶⁾

(30) 「4」

What has four eyes and cannot see?

目は4つあっても、ものが見えないのは。

(ミシシッピ: Mississippi) ['i' = 'eye' が4つある]

(31) 「6」

How can you prove that a horse has six legs?

馬には足が6本あるということを、どうしたら証明できるかな。

(どんな馬でも前足は4本、後足は2本ある: Every horse has four legs (forelegs) in front and two behind.)⁷⁾

(32) 「39」

Where did Washington go when he was 39 years old?

ワシントンは39才のとき、どこへ向かっていたのでしょうか。

(40才: into his 40th year)

(33) 「1000」

What have a thousand eyes but can't see?

目がたくさんあるのに、ものが見えないのは。(指ぬき : thimble)

A little thing has a thousand holes.

千もの穴のついた小さなもの。(茶濾し : strainer)

以上の例から分かるように、「1000」は、3例しかないが、「多さ」を具体的な数値で表すために用いられていることは明白である。

3.4 色彩語

日本の二段なぞでは、色彩語が入った例数が12であったが、英語は、次の2例(白, 灰色)のみである。

(34) What is whiter than milk? ミルクより白いものってなあに。

(雪 : snow)

What is big, grey and mutters? 大きくて灰色で、ぶつぶつ言うのは。

(ちんぷんかんぷん : mumbo jumbo⁸⁾)

今回のデータでは、英語の例が2例しかなく、日本の二段なぞより少ない。しかし、反義語の用法としての色彩語は、二段なぞより多くの例があったことを指摘しておく(清海 2012a)。

3.5 身体名称

身体部分の名称が含まれたなぞなぞは、9例で、日本の二段なぞの11例よりは少ない。「足」が3例、「目」が2例で、残りは、すべて1例ずつで1例に2つの身体名が使われている例は2例ある。また、以下最初の5例で分かるように、似たような構文が認められる。それは、‘What (is it that) has..., but/yet cannot...’で代表されるように、何かをもっているのだが、それにもかかわらず、そのものを持っていればできるであろうことができないという矛盾を表現するなぞである。最初に、構文で矛盾が表された例を挙げる。

(35) [構文]

What has a face, 顔があっても、

- But cannot see? 見えないものは。(柱時計 : clock)
What has a mouth but can't talk? 口があっても話せないもの。
(川 : river) [河口を 'river mouth' と言う。]
What is it that has four legs and one back, 脚4本と背中もあって,
Yet can't walk? 歩けないのはなあに。(いす : chair)
What has four eyes and cannot see? 目は4つあっても、ものが見えない
のは。(ミシシッピ : Mississippi) ['i' = 'eye' が4つある]
What have a thousand eyes but can't see?
目がたくさんあるのに、ものが見えないのは。(指ぬき : thimble)

次に構文で表されない例を見ることにする。

(36) [構文でない]

- House with one leg. 1本足の家。(傘 : umbrella)
How can you prove that a horse has six legs?
馬には足が6本あるということを、どうしたら証明できるかな。
(どんな馬でも前足は4本, 後足は2本ある : Every horse has four legs
(forelegs) in front and two behind.)
Why is your heart like a policeman?
君の心臓はなぜおまわりさんに似ているの。
(心臓は正常な鼓動をし, 巡査はいつも巡っているから :
Because it follows a regular beat.⁹⁾)
What is this? 背骨2本に
Only two backbones, 千本のあばら骨
A thousand ribs. これなあに。(鉄道線路 : track)

上でも述べたが、(35)の例は似た構文で表現されて、すべてが矛盾を表すなぞである一方で、構文で表されない(36)の中のなぞなぞには矛盾の例が全く含まれていない。また構文であるかないかに関係なく、9例中6例に数が用いられていることは注目されるべきである。

3.6 音解きなぞ

今回のサンプルデータである「イギリスのなぞなぞ」の中で、音解きなぞとして分類されている10例の問いには、反義語、繰り返しが1つも見つからなかった。これらのなぞの多くは、答えに、問いの中の語の一部分が含まれたり、答えが同音異義語であったりして、問いだけでなく、答えを含めると、音や意味が反復されると仮定できる。例えば、次の例は、問いの中の語の一部と答えが重複している。

(37) What tune makes everybody glad?

万人を喜ばすのはどんな曲 (tune)。 (幸運 : fortune)

What pets make the loudest music?

何よりも大きな楽音を出すペットはなあに。(トランペット : trumpet)

上の2例では、問いの 'tune' と答えの 'fortune', 問いの 'pet' と答えの 'trumpet' が韻を踏んでいる。次は、答えが同音異義語として解釈される例である。

(38) What bird is religious?

信心深い鳥は、何鳥。 (紅冠鳥[枢機卿] : a cardinal)

上のなぞの答えの 'cardinal' は、「枢機卿」と、「ショウジョウコウカンチョウ(猩々紅冠鳥一オスは、全身が鮮紅色である)」を表す。即ち、答えは、1つの語で、2つの意味があるため、実際に音は繰り返されていないが、2種類の 'cardinal' の存在を暗に示し、潜在的な反復があると仮定できる。

一方で、次の例では、答えが同音異義語で3回繰り返されている。

(39) What is the difference between a sigh, a motorcar and a monkey?

ため息と自動車と猿とではどちらがうの。

(ため息はおやまあ、車は値段が高すぎる、猿はお前さんのこと :

A sigh is oh dear. A car is too dear. A monkey is you, dear.)

上の答えでは、'dear' が3回繰り返されているが、それぞれ意味が異なっている。最初の 'dear' は、間投詞でびっくりした時に発する 'dear' で、二番目は、「高い」、三番目は、呼びかけの「いとしい人」と言う意味である。

また、次のように答えが単純な音の繰り返しでない例もある。

(40) What's the difference between a postage stamp and a girl?

郵便切手と女の子とはどちらがう。

(一方は郵便料金で、他方は女性: One is a mail fee and the other a female.)

上の例は、答えに同音の繰り返しが生じてはいない。実際には、名詞句 ‘mail fee’ (/méil fi:/ 「郵便料金」) と名詞 ‘female’ (/fi:meil/ 「女性」) は、音節が逆になり、アクセントも若干異なるのであるが、類似音として認識され易く、同音反復に似た効果が現れていると推測できる。

以上のように、音解きなぞとして分類されている問いには、問いには繰り返しが無いものの、解答と関連して、ある種の反復が生じていると考えられる。その理由は、上で紹介したように、問いと答えが部分的に共通している例や、解答が潜在的に反復されていると仮定できる例が見られるからである。

3.7 英語のなぞ：まとめ

英語で反義語と反復表現を含まない45例のうち39は、‘how, what, which, who, why, when, where’ が問いの最初の要素であることが分かった。即ち、データの約87%がこれらの疑問詞で始まる。その内25例は、‘what’ で始まり、約56%に相当する。サンプルデータ45例の表現で、「場所」「時間」「数」「色彩語」「身体名称」に関連する語彙について調査したところ、「場所」に関する語は7例であった。次に「時間」は2例だけであった。「数」を含むなぞなぞは、10例で、「1」「4」「1000」が一番多く、3例ずつあった。「色彩語」は2例で、「身体名称」は、9例あり、「足」が3例、「目」が2例だった。また反義語と反復表現が見つからなかった音解きなぞの多くは、答えが問いの語の一部と重複したり、答えが同音異義語であった。これらのなぞは、問いだけでなく答えの表現も考慮に入れると、音や意味の反復が仮定できることを提案した。

4. 日英間の共通点と相違点

反義語と反復表現を含まない割合は、日本のなぞなぞが158例中58例で、約37%になり、一方、英語のサンプルデータの総数は130であり、反義語と反復表現が含まれないなぞは45例で、総数の約35%である。従って、日英では共通して、サンプルデ

一タの3分の1が、繰り返し表現や、対立する語彙なしに成立していることが分かった。また、英語のなぞなぞの9割近くが、‘wh-questions (‘how’も含めた)’で始まっていた。これらは、2.で扱った日本の二段なぞの最後の部分で、本稿では省略した「…なあに」や「…なんだ」に相当している。日英の違いは、日本の二段なぞでは大抵「何であるのか」を問うのだが、英語では、‘what’から始まるなぞが半数以上ではあっても、その他の疑問詞である‘which, who, why, when, where’も使われている点である。

「場所」、「時間」、「数」、「色彩語」、「身体名称」に関連する語彙がどの程度なぞなぞの表現に使われているか調査したところ、特に「場所」と「色彩語」については日英間で使用頻度に明確な差が観察された。日本のなぞで「場所」に関する語が、58例中33例に見られ、サンプルデータの6割弱に相当した。一方、英語のサンプルでは、7例(約17%)だけに場所を示す語彙が見つかった。つまり、日本のなぞなぞでは、「場所」の表現が重要な役割を果たしていると考えられる。今回のサンプルデータの「色彩語」は日本のなぞには、12例も見られたが、英語のなぞは2例だけだった。しかし、反義語の用法としては、より多くの色彩語が、英語のなぞの方に見つけられた(清海2012a)ことから、日本のなぞの方が色を好んで使用する傾向があるとは言えない。

「数」にかんしては、共通する性質が認められた。日本のなぞは、「数」が24例で見つけられ、データの約4割であった。「1」が11例で一番多く、「2」、「3」、「1000」が2番目に多く5例ずつあった。それに対して、英語のなぞで「数」が使われているのは10例で、使用頻度の割合は日本よりかなり低いが、「1」が一番多く(3例)、次が「1000」(2例)であり、差のある数が使用されるという点で、日英のなぞに同質の傾向がみられた。「身体名称」は、日本のなぞが11例で「目」が一番多く(3例)、英語のなぞは、9例で「足」が一番多く(3例)、2番目が「目」(2例)だったので、それほどの違いはなかった。

以上をまとめると、日英に共通する特徴の一つは、反義語と反復表現を含まない割合がほぼ同じであり、日英ともに、サンプルデータの3分の1であったことである。また、日英ともに、「数」の使われ方が類似していて、一桁の数か、または四桁の数をというように差のある数が用いられていた。相違点としては、「場所」の表現が日本のなぞでは重要な役目を果たしている点である。また、英語のなぞの9割近くが疑問詞から始まるが、日本の二段なぞ最後の「…なあに」や「…なんだ」に相当する‘what’だけでなく、その他の疑問詞の‘which, who, why, when, where’

が使われていることも異なっている。

5. なぞなぞの特徴

この節では、なぞなぞの特徴について4つの視点から概観する。5.1では、こどもにとってのなぞなぞを考え、5.2は、なぞなぞらしさとは何かについて検討し、5.3は、なぞなぞの分類を取り上げ、5.4は、ことば遊びとしてのなぞなぞの機能について検討する。

5.1 子どもとなぞなぞ

鈴木(2009: 236-244)によると、子どもの二段なぞの多くは、観察型、あるいは、描写型とも呼べるような、平易で手がこんでいない性質のものである。¹⁰⁾ 鈴木は、二段なぞで単純なものとして次を挙げている。

- (41) 海の中に草履一枚 (鯨かれい)
 段々畑白畑ナーニ (障子)
 兄弟三人首かしげ (五徳)
 朝起きて人のまわりを廻るものナーニ (帯)

上の例から分かるように、すべてが比喻であり、2例は擬人化されている。また、やや複雑化されたなぞの例としては、次が挙げられている。

- (42) 殿様三人針千 (栗)
 六尺男に目一つナーニ (襖ふすま)
 隣行って戸口で立って待ちちよるもんナーニ (杖)
 とげ屋の隣の皮屋の隣の洪屋の隣の中のお女郎ナーニ (栗の実)
 木さま糊さま紙さま (障子)

擬人化が進むと、次の例のような擬人名が使われる。

- (43) 播磨の国の歌之助 (にわとり)
 竹造殿もくさ左蔵殿もくにいった (自在かぎ)
 上も街道、下も街道、中を通る通右衛門 (雨戸)

歯抜け孫次郎すべ [わらしべ]くわえて走る (むしろの棧竹)
お竹が腹が痛うておなかがひねっておちちが押さえるもの (壁)

上のように名前を組み込むことで、問いが身近な印象を与える効果があり、童唄や囃しことばにもしばしば人名が使われていると鈴木は説明している。また、擬人法の逆として、次のように人体の部分を動植物または、無生物に喩えている例が挙げられている。

(44) 峠三つ越えた先にある白い石ナニ (爪)
めんめんすうすう毛虫に萱茸^{かあたらけ} (目・鼻・眉・耳)

以上の例は、モノや、人以外の生き物を人に喩えるか、逆に人体をモノに喩えるかの違いはあっても、「比喩」であることには変わらない。次の5.2で分かるように、池上(1997)は、比喩と矛盾をなぞなぞの重要な要因であると主張しているが、鈴木が挙げる例は、比喩のなぞだけで、「矛盾」する内容のなぞは見つからない。多分その理由は、なぞの原初は、直接的な描写であると鈴木が考えているからである。Rodari(1973)も、なぞなぞを作る過程で必要な連鎖を<異化—連想—隠喩>と主張している。¹¹⁾ 従って、なぞなぞにとって、「比喩」が最も基本的で重要な要素であるとみなすことが自然であろう。

また、鈴木は、子どもの口遊びには、意味や内容よりも口調のよいことばを唱えることが多いと言う。なぞなぞは繰り返されれば、答えも知られ問いとしての興味が失われる。そこで、次のように歌のような口拍子調の二段なぞが多いと述べている。

(45) 上げたり下げたり三五郎兵衛、人足そろいて兵衛ナーニ (炉のかぎ)
正月過ぎて春過ぎて 茜^{あかね}小袖をぬぎ捨てて坊主あたまに皿一つ
ナーニ (けしの実)
白い白いに大白い水晶白玉ゆうご (夕顔)の葉ナーンジャ (むしろ)

また、口調が良いなぞには、次のような量込み式が多い。

(46) 一里行ってすっぱすっぱ二里行ってすっぱすっぱ三里目に火事

あるナーニ (きせる)

一山越えて二山越えて三山目の奥に火がちんがりちんがりナーニ
(きせる)

呉服屋の中に金物屋があつて金物屋の中に米屋があつて米屋の中
 に八百屋があるもの (お弁当)

以上挙げたさまざまななぞで注目すべき点は、鈴木 (2009: 243) が述べているように、すべての子どものなぞは、口調がよくなければ喜ばれなく、口拍子にのせるのは、何も記憶するためだけの条件ではなかったと考えられることである。鈴木は指摘していないが、上にあげた口拍子で唱えるなぞなぞの例 (45) (46) に、「反義語」(例：上げる一下げる) や「繰り返し」(例：「過ぎて」「白い」「行って」「越えて」「あつて」「一屋」) が用いられ、口調と同時に、意味を強調するため、表現自体に工夫された跡があることを見逃すべきではない。鈴木の説明から言えることは、なぞなぞの問いは、単に答えを得るためだけのことば遊びではないということである。従って、時には、なぞなぞの問いの表現自体に焦点が当てられ、子供たちは、リズムがよく面白いことばを探し出し、その内幾つかの可能性から一番楽しめるものを選び出すことに試行錯誤していたのではないかと想像される。

5.2 「なぞなぞらしさ」

なぞなぞは、単なる質問とどのような違いがあるのであろうか。池上 (1982: 131-175) を参考に考えていく。なぞなぞは、言葉での問いと答えのやりとりであるが、「1 たす 1 はいくつですか」——「2 です」や、「花子が持っているのは何ですか」——「パンダのお人形です」などは、なぞなぞにはなり得ない。その理由は、なぞなぞが成立するためには、何らかのひねりが必要だからであり、池上は、そのためには「比喩」と「矛盾」という二つの要因が重要になると述べている。まず、「比喩」が含まれるなぞなぞについて考えることにする。例えば、次のなぞは、擬人法が用いられている (池上, 1982: 134-136)。

- (47) (i) 朝早く起きて赤い頭巾をかぶって庭掃除するのはダーレ。 (答：にわとり)
- (ii) 口から紙食べて、お腹から出すもの、ナーニ。 (答：ポスト)
- (iii) 赤い顔して木からぶら下がっているもの、ナーニ。 (答：柿)

擬人法で、答が人間に喩えられているわけである。池上は、以下のように擬人法が用いられなければ、なぞなぞではないと言う。

(48) 朝早く起きて、コケッココーと鳴く鳥、ナーニ。

しかし、次のように少し変えると「なぞなぞ」らしくなると述べている。

(49) 朝早く起きて^{とき}関の声をあげるのは、ダーレ。

「ダーレ」という擬人法で人間を指しているようにひねりがある。つまり、比喩であることで「なぞなぞ」らしさが高められていると考えられる。

なぞなぞの型に関して、池上 (1982: 148-154) は、「比喩」と「矛盾」という二つの要因の関連性の点から4分類している。なぞなぞは世界のほとんどの民族に見られ、構成原理は基本的に同じようであり、日本と外国の例が4つに分類されている。以下に、日本と外国の例 (答えの次の括弧に国名/民族名を書き入れた) を一例ずつ挙げる。

(50) (i) 「比喩」なし: 「矛盾」なし

一番先に黒くて、その次に赤くて、その次に白くなるもの、

ナーニ。(答: 炭)

秋におちてきて、春になると川の中に消えるもの、ナーニ。

(答: 雪) (シベリアのケット族)

(ii) 「比喩」あり: 「矛盾」なし

山が回れば、霞が降りる、ナーニ。(答: 臼)

ふたりのおじさん、おんなじ背丈、ごはんを食べると相撲をとる。

(答: 箸) (中国)

(iii) 「比喩」なし: 「矛盾」あり

きれいな着物着ても、汚い着物着ても同じに見えるもの、ナーニ。

(答: 影)

見ようと思わないのに見え、見ようと努力しても見えないもの、

なあに。

(答: 夢) (フィンランド)

(iv) 「比喩」あり：「矛盾」あり

家の中において、外を歩くもの、ナーニ。 (答：カタツムリ)

耳がなくても聞こえます、口がなくても話せます。どこの国の言葉でも、
あつという間に覚えます。 (答：こだま) (スウェーデン)

「なぞなぞらしさ」にかんして言うと、池上は、「比喩」と「矛盾」の両方が含まれたなぞが一番高く、次にどちらか一方がある場合、そして、「なぞなぞらしさ」が最も低められるのは、(50i)のように、「比喩」と「矛盾」がないなぞだと述べている。実際子どもが自分でなぞなぞを作るとよくこの型になることが多い。

「比喩」と「矛盾」の両方が見いだせない日本のなぞなぞは、次のように全部で3例が挙げられている(池上 1982: 149)。

- (51) (i) 明けても暮れても家の中にぶら下がっているもの、ナーニ。(電灯)
(ii) 眼二つ足八本あるもの、ナーニ。(タコ)
(iii) 一番先に黒くて、その次に赤くて、その次に白くなるもの、ナーニ。
(答：炭)

池上は、上の3つの中で、(51i)がもっともなぞなぞとしての資格に欠けるのではないかと述べている。確かに、上の3例はひねりが全くなく、そのままの状態を表しているだけである。しかし、池上が触れていないことで、これら3文の表現に興味深い技法があることも指摘しておきたい。まず(51i)では、「一日中」と言えるところを「明けても暮れても」と表現することで、反義語[明ける-暮れる]という意味対立や、「一ても」の繰り返しを利用して、なぞなぞ全体の印象が強められている。同様に、(51ii)では、数字の対立[2-8]、また、(51iii)では、[黒-赤]、[赤-白]、[黒-白]という色の対立や、[一番-次]という順序の対比が用いられている点も注目すべきである。つまり、なぞなぞの内容と平行して、表現上、「対立」や「繰り返し」などの技法で、普段のことば使いより印象的で、同時に具体的なイメージを喚起するような工夫がされていることを見過ごすべきではない。

池上によると、「なぞなぞ」を成立させる「比喩」と「矛盾」という二つの要因は、互いに違う性質でありながら、読者の立場で受ける印象での共通点がある。それは、「意外性」とでも呼べるもので、「日常性——あるいは、日常性への慣れからくる惰性——の打破」(池上1982: 156)と説明される。つまり、はっきりとした「比

喩」や「矛盾」が含まれていないものでも、「意外性」が少しでも含蓄されているなら、最小限ではあっても「なぞなぞ」として通用すると考えられる。その例として「眼二つで足八本」(答：タコ)が挙げられている。一般に、眼が2つある多くの動物は足が2本か4本であるという前提を「8本」と言うことで崩し、かなり低いレベルではあるが、意外であるという印象を与えることができる。そこで、池上の言う「意外性」は、我々の一般通念(ある種の思い込み)を覆す程度が大きいほど「なぞなぞ性」が高まると理解できる。

5.3 なぞなぞの分類

なぞなぞはこれまでどのように類別されてきたのであろうか。ここでは、従来の分類を紹介した後、「音解きなぞ」(‘conundrums’)と「文字解きなぞ」について検討する。なぞなぞの分類基準は確立していないが、大雑把な分け方は今まで提案されている。例えば、橋内(1990)は、英語のなぞを解き方から、「意味解きなぞ：比喩(隠喩)を手がかりに解くもの(‘true riddles’)」、「音解きなぞ：同音異義(しゃれ)を手がかりに解くもの(‘conundrums’)」、「文字解きなぞ：文字の形や綴り字を手がかりに解くもの(‘the rebus’)」の3種類に分けている。日本のなぞなぞは、鈴木(1981)が、「二段なぞ」、「三段なぞ」、「考えもの」、「やまとことば」の4種類に区別している。¹²⁾ 一方で、向井(1989: 332)は、なぞなぞがことば遊びの原型であると考え、次のように4分類している。¹³⁾

- (52) i) 比喩的表現による<なぞ>
- ii) 矛盾的表現による<なぞ>
- iii) 「字謎」を踏襲した<なぞ>
- iv) 「しゃれ」による<なぞ>

上に示された分け方は、日英のなぞを扱うのに最も適した分類法であるように思われる。その理由は、鈴木(1981)の分類が日本のなぞに限ったものであり、橋本の3分類をより正確にしたのが向井の提案する4分類であると捉えられるからである。向井は、橋本の「意味解きなぞ(‘true riddle’)」を「比喩」と「矛盾」から成るなぞとしている。しかし、5.2の(50i)で見たが、比喩も矛盾も表さないような「なぞなぞ性」が低いなぞが存在することも否めない。また、向井の「しゃれ」による<なぞ>は、橋本の「音解きなぞ(‘conundrums’)」に対応し、「字謎」を踏襲し

(54i) は、地口が答えにある例で、答えの ‘ajar’ 「少し開いている」と ‘a jar’ 「一つの瓶」とかけている。(54ii) は、地口が問いにある例であるが、なぞの内容について少し説明が必要であろう。キリスト教の Lent (四旬節) の初日 (‘Ash Wednesday’ 「灰の水曜日」[カトリックで懺悔の象徴として頭に灰をふりかけたことから]) の前日に当たるのが ‘Shrove Tuesday’ である。Lent は、日曜日を除く 40日間続き、以前は減食や好物、楽しみを断つことになっていたことから、その前の日の ‘Shrove Tuesday’ には、ごちそうを食べていた。現在では、パンケーキを食べる風習があり、イギリス、アイルランド、オーストラリア、ニュージーランド、カナダでは、‘Pancake Day’ や ‘Pancake Tuesday’ とも呼ばれている。このなぞの地口について言うと、パンケーキは油を使って炒め調理する (‘fry’) ので、‘Friday’ に ‘fry day’ (この場合の ‘fry’ は「油を使って調理された食べ物」という名詞であると思われる) をかけている。このなぞは、問いが「どの金曜日 (‘Friday’) が…」なのに、答えが「火曜日 (‘Tuesday’)」になる点も、ある種の反義的なひねりがきいている。

上の例 (54ii) は、キリスト教の知識がないと難解な問いである。3節で検討したデータサンプルの中には、次のような分かりやすい例がある。

(55) What language should a linguist end with?

語学に堪能な士は何語でお開きとするか。(フィンランド語: Finnish)

このなぞの答えは、発音が共に /finiʃ/ の ‘Finnish’ (「フィンランド語」) と ‘finish’ (「終える」) という 2 種類の意味をかけている。この 2 重の意味が連想されることで、答えには音的な繰り返しが暗示されていると仮定することも可能である。同時に、問いの ‘end’ (「終える」) と答えの ‘Finnish’ (暗に ‘finish’ を意味している) の間には、同義語として意味の反復があると認められる。

Augarde (2003:12) は、多くの ‘conundrums’ が ‘What is the difference between...’ という型で、答えの 2 語の間で巧妙なすりかえがされていることを指摘して、次の例を挙げている。¹⁴⁾

(56) (i) What is the difference between an elephant and a flea?

ゾウとノミの違いは何か。

(ゾウにノミがつくけど、ノミにゾウはつけない: An elephant can

have fleas, but a flea can't have elephants.)

(ii) What is the difference between a cat and a comma?

ネコとコンマの違いは何か。

(ネコは、足 ('paws') の先に爪 ('claws') をもっているが、コンマは句 ('clause') の先に句切り ('pause') がある : A cat has its claws at the end of its paws, and a comma has its pause at the end of its clause.)

(56i)は、問いの2つの名詞が答えで順が入れ替わって繰り返されている。(56ii)のなぞには、同音異義語が2対ある。即ち、'paws' と 'pause' は同音の /pɔ:z/, 'claws' と 'clause' は同音の /klɔ:z/ であり、さらにこれら2つの音韻には /ɔ:z/ という脚韻がある。

次に、「文字解きなぞ」の例を取り上げ、その性質を検討する。向井が紹介している例には以下のものがある。

(57) (i) 「三人の日」はいつごろのことでしょうか。 (春)

(ii) 空のなかを飛んでいる虫は。 (ハエ)

(57i) は、春という漢字が、「三」と「人」と「日」から成立していることに気がつけば解答を得られるが、問いの「三人の日」を「こどもの日」のような「…の日」との関連から考えると正答は得られない。(57ii) は、「空」という漢字の中には、カタカナの「ハ」に似た文字と「エ」があるので、問いの「飛ぶ」にひっかからずに、「空のなか」という部分に注意し文字に焦点を当てると分かるなぞなぞである。

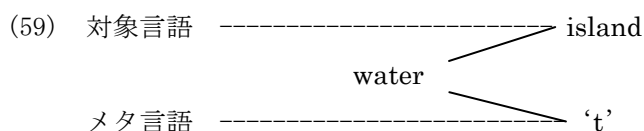
3節で扱った下の例は英語の文字解きなぞであると考えられる。

(58 (=24)) Why is an island like the letter T?

島はなぜ T という字に似ているの。

(水 (water) の中にあるから : Because it is in the midst of water.)

西川 (1996: 80) は、上のような文字解きなぞの答えを得るプロセスでは、次の図で示されるように、対象言語とメタ言語という2つの言語レベルでの認知が行われていると提案している。



上の図で, 対象言語のレベルとしては, 一般的に, 実際の世界で, 島 ('island') が水 ('water') の中にあることを指す。これに対して, メタ言語のレベルでは, われわれの認識がことばに向き, 文字の 't' が, 'water' という 5 文字の真中にあることを認識させられる。

それでは, 今回検討したサンプルデータの中から別の文字解きなぞの例を扱うことにする。次の 2 例を比較してみよう。

(60) What is the longest word in the English language?

最長の英単語はなあに。(スマイルズ (Smiles)。最初の字と最後の字の間に 1 マイルあるから : Smiles. There is a mile between the beginning and the end of it.)

(61) I 80

M
on
day

(月曜日には, 何も食べなかった。 : I ate nothing on Monday.)

上の (60) は, 対象言語とメタ言語という 2 つの言語レベルで認知が行われていると言えるだろうが, (61) は, 文字解きなぞというより, 「判じもの」として捉えるべきだろう。数字の '80' を分けて, '8' を 'ate' と読み, '0' はゼロを表すので, 'nothing' と読む。次にすぐ横の 'on' を読み, その後, 右の文字を縦に続けて 'Monday' と読み, 右全体で 'on Monday' になる。

日本の二段なぞのデータの中で, 文字解きなぞの一つの例として次が挙げられる。

(62) 1 つ字を書くと赤になり, 2 つ字を書くと白になるもの。

(ち : 血と乳になる)

この例には、[赤－白] という反義語があるだけでなく、「1つ」、「2つ」が対立する反義的要素として含まれている。

以上、「しゃれによるなぞ（‘conundrums’）」と「文字解きなぞ」についての実例を日英で検討した。これらのなぞは、同音異義語などの言語音を利用したなぞや、文字そのものに対するなぞで、メタ言語的な特質を表している。従って、5.2で扱った比喩的表現または、矛盾的表現によるなぞとは、本質が異なると思われるべきである。

5.4 ことば遊びの機能

滝浦（2002）は、ことば遊び（駄洒落、むだ口、時口、折句、アナグラム、回文、なぞかけ、しりとり）の機能について考察している。ことば遊びは、Jacobson（1960）の「詩的機能」の観点から考えてみると、「病的言語」と同質のものになってしまう危険性があると述べている。Jacobsonは、両者の類似は論じているが、その違いを論じていないと指摘する。そこで、滝浦は、「詩的言語」と「病的言語」の線引きは、「文脈の質」であり、後者には、一貫した文脈がみられないが、一方で、「詩的言語」は、種類に対応して、文脈の質が多様であり得ると主張する。また、「ことば遊び」を、Grice（1975）の会話理論である「協調の原理」（‘cooperative principle’）に照らし合わせている。その原理の4つの maxims（公理）は以下の通りである。

- (63) (i) Maxim of Quantity（量の公理） --- 必要な情報を伝え余計なことは言わない。
- (ii) Maxim of Quality（質の公理） --- 真実を伝え、間違っていると思うことや、根拠のないことは言うな。
- (iii) Maxim of Relation（関係の公理） --- 関連することを言え。
- (iv) Maxim of Manner（様態の公理） --- 不明瞭、曖昧であること、また不必要に冗長を避ける。順序だてて話せ。

ことば遊びは、上のすべての公理に違反しているので、皮肉や隠喩のような狭義の「レトリック」とは異なる性質であり、“伝えない” コミュニケーションになると滝浦は捉えている。つまり、メッセージ自体をメタ的に焦点化することが、ことば

遊びであるので, ことば遊びの主な機能は, Jacobson の「メタ言語的機能」(‘metalingual function’) を体現することになると主張している。

それでは, ことば遊びの一つであるなぞなぞの機能は, 滝浦の唱えるように, 「メタ言語的機能」であろうか。5.3で検討した向井の4分類の中では, 「しゃれによるなぞ」と「文字解きなぞ」は, ことばそのものの側面を取り入れたことば遊びである。特に, 文字解きなぞは, 文字そのものが, なぞの核となっているので, メタ言語的レベルが高いと言える。また, 「しゃれによるなぞ」(‘conundrums’) は, その答えが問いの類似音に基づくこともあり, メタ言語的要素を内包すると考えられる。それに対して, 比喩的表現または矛盾的表现によるなぞは, ことばそのものより, ことばが表す内容に基づくなぞである。これらは, 口調を楽しむ等のメタ言語的要素がないとは言えないが, 「詩的機能」も果たしていると考えた方が理に適うと思われる。以上の理由から, なぞなぞは, 「詩的」及び「メタ言語的」機能が備わっていると提案する。

5.5 まとめ

この節では, なぞなぞの特徴について4つの視点から概観した。5.1では, 鈴木(2009)を参考に, 子どもにとってのなぞなぞは, 観察型と呼べるような単純な比喩が多く, また単に答えを求める問いではなく, 意味や内容よりも口調のよいことばを唱えることで楽しめることば遊びであることを確認した。5.2は, 「なぞなぞらしさ」を比喩と矛盾という要素だけでなく, 「意外性」からも捉えられることが示された(池上1982)。5.3は, 向井(1989)のなぞなぞの4分類を紹介し, 「しゃれによるなぞ」と「文字解きなぞ」の実例を検討した。5.4では, ことば遊びの機能を「メタ言語的機能」であると主張する滝浦(2002)の説明を見た後で, 向井の4分類で, 「しゃれによるなぞ」と「文字解きなぞ」は, メタ言語的であると言えるが, 比喩的表現または矛盾的表现によるなぞは, 「詩的機能」を果たしていることを指摘した。

6. 結論

『世界なぞなぞ大辞典』(1984)の「日本本土のなぞなぞ」と「イギリスのなぞなぞ」という項で紹介されているデータを参考にし, 日本の伝統的な子供向けの「二段なぞ」と, 英語(イギリス {ケルト語圏を除く}とアメリカ合衆国に限る)のなぞなぞで, 反義語や繰り返しが無い例を取り上げ, 比較検討した。具体的には, 日英のデータの中で, 「場所」「時間」「数」「色彩語」「身体名称」に関連する語彙がどの

程度使用されているか調査した。

日英の共通点は、反義語と反復表現を含まない割合がほぼ同じで、なぞなぞ全体のデータの3分の1であった点である。反義語と反復表現が含まれない数は、日本のなぞなぞが158例中58例(約37%)で、英語は、130例中45例(総約35%)であった。また、日英ともに、「数」の使われ方が類似していて、一桁の数字か三桁か四桁の数をというように差のある数が観察された。相違点の1つとしては、日本のなぞで、「場所」の表現が重要な役目を果たしていることが挙げられる。「場所」に関連する語は、日本のなぞで58例中33例(約57%)であったが、一方、英語のサンプルでは、45例中7例(約17%)だけであった。また、英語のなぞの9割近くが疑問詞から始まるが、日本の二段なぞ最後の「…なあに」や「…なんだ」に相当する‘what’だけでなく、その他の疑問詞の‘which, who, why, when, where’が使われていることも異なっている。

本稿の後半は、なぞなぞの特徴を4つの視点から検討した。まず、子どもにとってのなぞなぞは、比喩表現を含んだ観察型のなぞが多いこと、また、問いが単に答えを求めるのではなく、口調のよいことばを唱えることで楽しめることば遊びであることも確認した。「なぞなぞらしさ」は、「比喩」と「矛盾」という要素に関連した「意外性」からも判断できることが示された。次に、向井のなぞなぞの4分類を取り上げ、その中の「しゃれによるなぞ」と「文字解きなぞ」の実例を検討した。最後に、なぞなぞの機能について、「しゃれによるなぞ」と「文字解きなぞ」は、メタ言語的であるとしても、比喩的または矛盾的表現によるなぞなぞには、「詩的機能」が備わっていると提案した。

注

- 1) 以下、なぞなぞの答えは例の後のカッコ内に書かれる。
- 2) 太鼓たたくは、‘ta’の繰り返しだが、意図的ではないと思われる。
- 3) この問いは、「炉の火」を「鱒の切り身」に見立てている。
- 4) 家に関連する‘bed’が含まれている例があるが、成句で‘go to bed’(「寝る」)として使われているので、ここでは扱わないことにした。
- 5) 答えの‘record’が「記録」と「犯罪歴、前科(‘criminal record’)」の意味の二つをかけていると考えられる。
- 6) 英米では、月を人の顔に見立てるが、三日月は顎の出た老人に見えるという。

- また, ‘score’ は「20」という意味で, このなぞなぞでは, $4 \times 20 = 80$ となる。
- 7) このなぞなぞは, ‘forelegs’ 「前脚」と ‘four legs’ 「4本の足」の発音が同じであることを利用している。答えは, 前脚が4本, 後脚が2本で合計6本となる。
 - 8) このなぞなぞは, いわゆる ‘Elephant Riddles’ (ゾウさんなぞ) の1つである。このなぞの答で, 2つの語から成る ‘mumbo jumbo’ (「ちんぷんかんぷん」)は, それぞれの音と意味がもじられていると推測される。つまり, ‘mumbo’ は, ‘mumble’ (「もぐもぐものを言う」) に似ている音であり, ‘jumbo’ は, 「大きいゾウ」を意味している。
 - 9) ここでは, ‘beat’ が表す「(心臓の) 鼓動, 脈拍」と「(警官・夜警などの) 巡回」の二つの意味にかけている。
 - 10) 鈴木 (2009: 238) によると, 三段なぞは, 若者の教養の必須科目とされ, 子どもにはその面白みが分からないというだけでなく, 子どもが遊ぶべきではないという共通理解があったらしい。
 - 11) ジャンニ・ローダリ, 窪田富男訳『ファンタジーの文法—物語創作法入門—』(1990: 94)
 - 12) 「二段なぞ」の形式は, 「…なものはなに?」で, 「三段なぞ」は, 「…とかけて…と解く。その心は…?」と三段で構成されている。二段なぞは, 素朴な子ども向けのなぞなぞで, 三段なぞは, 子どもには難解な大人のためのなぞである。「考えもの」は専門家の作爲的性格のもので判じものとも呼ばれる。また, 「やまとことば」は主に近年まで行われていた恋のなぞことばである。
 - 13) 向井 (1989: 367) は, 以上の4分類の他に「いじわるなぞなぞ (例: 夏になると人はなんで泳ぐのかな?—答え: 手や足, 浮き輪で泳ぐ)」を加えると, なぞなぞ全体の9割以上が分類できると述べている。
 - 14) 清海 (2012c) では, 英語の ‘conundrums’ は, 日本の三段なぞと性質が近いと考えた。Dienhart (2010: 36-39) の ‘What’s the difference between X and Y?’ という形式で表現されるタイプの例を取り上げ, 三段なぞでは答えの反復が暗示的であるが, 英語のこのタイプの ‘conundrums’ は, 答えに明示的な反復があると指摘した。

参考文献

- 池上嘉彦 1982 (1997⁶). 『ことばの詩学』 岩波書店, 東京.
- 奥津文夫 2000. 『日英ことわざの比較文化』 大修館書店, 東京.
- 清海節子 2012a. 「日本と英語のなぞなぞ比較 (1): 反義語の用法を中心に」 『駿河台大学論叢』 44: 87-110.
- 清海節子 2012b. 「日本と英語のなぞなぞ比較 (2): 反復用法を中心に」 『駿河台大学論叢』 45: 90-126.
- 清海節子 2012c. 「なぞなぞに於ける反義語と反復の役割」 『日本エドワード・サピア協会研究年報』 26: 69-80.
- 鈴木棠 2009. 『ことば遊び』 講談社 [講談社学術文庫], 東京.
- 滝浦真人 2002. 「ことば遊びは何を伝えるか?—ヤーコブソンの〈詩的機能〉とグライスの会話理論を媒介として—」 『日本語科学』 11: 79-99.
- 西川盛雄 1996. 「ことばと認知」 穴戸通庸 (他) 『表現と理解のことば学』 64-84, ミネルヴァ書房, 東京.
- 橋内武 1990. 「英語のなぞなぞ」 『国際文化論集』 3: 79-99.
- 向井吉人 1989. 『素敵にことば遊び—子どもごろりのリフレッシュ—』 學藝書林, 東京.
- Augarde, Tony. 2003. *Oxford Guide to Word Games*, 2nd edn. Oxford: Oxford University Press. (トニー・オーガード (1984年の初版), 新倉俊一監訳『英語ことば遊び事典』 大修館書店, 1991.)
- Dienhart, John, M. 2010. "A linguistic look at riddles." In Nina Nørgaard ed., *The language of riddles, humor and literature*, 13-47. Odense: University Press of Southern Denmark.
- Grice, Paul. 1975. "Logic and Conversation." In Cole, P. and Morgan, J. (eds.), *Syntax and Semantics*, vol. 3: Speech Acts. Academic press.
- Jacobson, R. 1960. "Linguistics and Poetics" in T. Sebeok (ed.), *Style in Language*, 350-77. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Rodari, Gianni. 1973. *La Grammatica della Fantasia: Introduzione all'arte di inventare storie*, Einaudi. (ジャンニ・ロダーリ, 窪田富男訳『ファンタジーの文法—物語創作法入門—』 筑摩書房, 1990)

辞典

- 『世界なぞなぞ大辞典』 柴田武, 谷川俊太郎, 矢川澄子 (編) 1984. 大修館.
『新版ことば遊び事典』 鈴木棠三 (編) 1981. 東京堂出版.